

二〇二二年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

# 国語

## 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は二から三、3ページから23ページまであります。  
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。



□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

怒りは身体から発します。「腹が立つ」という言葉を聞けば、怒りの感情表現だとすぐにわかると思えます。とはいえ、頭では意味を理解できたとしても、本当に腹が「立つ」という感覚が怒りそのものであると体験し、納得している人はどれくらいいるでしょうか。

『平家物語』で「ふくりふ(腹立)」と表記されていることからわかる通り、「腹が立つ」という身体を伴った表現はこの島で暮らす住民にはおおむね馴染みがあるかと思えます。

長らく親しまれた慣用句のためつい見逃してしまいましたが、ここで言う「腹」は西洋の解剖学の知見が輸入される以前から人々が口に使っていたことなので、腹腔だとか腹筋だとかが指す部位ではありません。では、①古人の感じていた腹はいったいどこを指しているのでしょうか。腹と言えば力を込められる腹筋を想像しがちな現代人とは感覚的に隔たりがあるかもしれません。さらにはその腹が「立つ」に至ってはどうか。私たちは「立つ」という尖りをまざまざと感じられるでしょうか。

「立つ」の実感が難しいのであれば、「腸が煮え繰り返る」など体感するにはなかなかハードルが高いと言えるでしょう。どちらかと言えば「腹が立つ」よりは「ムカつく」や「キレル」「頭に来る」のほうがわかりやすい。ムカつくのは胸であり、「キレル」は脳の血管、「頭に来る」は文字通り頭部です。

ここからわかる通り、身体を伴う感情表現の場所はどこも上昇しています。そして、いまでは怒りは頭を通り越して空間に漂っており、②クラウド化している傾向が多分にあるようです。<sup>\*1</sup> 炎上騒ぎがいい例ですが、自分の身に起きたことではない出来事に対して多くの人が怒りを募らせるのは、あたかもサーバーに上げられたデータをダウンロードしているのにも近いように思えます。

このように身体を離れ、実感を伴わない一方で、怒りはなだめるべきものだし、中和させていくのが望ましいという見解が広まりつつあるのは興味深い現象です。

怒りをなだめる人たちは怒りの感覚を本当に味わい、体験しているでしょうか。怒りの発露にあるべき姿からの逸脱のサインを読み取り、それをともかく正そうとする人は、冷静さや平和、穏やかさを愛するからではなく、激した姿や怒らざるをえない生々しい現実を受け止めきれないだけかもしれません。

また「まあまあ、言いたいことはわかるけど」と怒りに理解を示し、あたかも翻訳するかのようには、言い分を説明してみせる人もいます。③他者の経験を社会的に価値付けられるようにしているとしても、その人の怒りと向き合っているとと言えるでしょうか。

常に冷静で穏やかであるのは、生物としては極めて不自然でも社会的には望ましい姿です。職場環境も一定の調子に揃えることができませんし、感情に煩わされない分、生産性もよくなるというわけです。「④」、人間は工作機械や人工知能ではないし、常に効率を考えたり職場の人間関係に受け入れられるために生きているわけではありません。

感情的になっても有意義なことはないし、生産性がない。そうして感情を意識的に抑制していけば、いつしか感じていることに価値を置けなくなり、体感を抑圧することになっていくでしょう。ただでさえ空気を読むことが不文律の掟になつていたのであれば、なおさらみんなとの和合のために自分の感情を封殺するほうに向かうでしょう。

「みんながそう言っている」「みんなのため」「普通はくでしょう？」と様々な言い方はされても、「あなたはどう思う、どう感じる？」と大事なAキョクメンであればあるほど聞かれることはありませんでした。そうして間接的に、体感を否定することが社会を生きる上で大事だと教えられてきたのです。

感情が確実に身体を伴わなくなっており、⑤いま私たちが「感情」と呼んでいるものは、もはや意識でコントロールできる装置めいたものになっています。セクシャリテイや人種など属性を差別するような言動であっても、それがビジネスパートナーや友人

の発言であれば、関係にヒビを入れたくないからという理由で甘受すべきでしょうか。「ここは怒りを抑えるべきだ」と自分に下す命令で感情を抑え込むことができるとしたら、それは冷静というよりは意識的に操作できるものになっていないはず。そうなる\*6げつこう\*7ひぶんこうがい やばんと激昂や悲憤慷慨は野蛮の証と受け取る感性が常識となっていくのも当然です。感情は庭師が手入れした木のようにきれいに切り揃えられ、荒々しさは趣向としてはよくても、本当に自然そのままの発露であってはならないのです。

けれども本来ならば感情は表れるものであって、封じたり我慢するものではありません。意識的にコントロールするため表出にならず、突然キレたりといった逸脱や暴走になってしまわないでしょうか。

身体が必要なだけ訴えている感情の輪郭を把握する術を私たちは失いつつあります。そこでみなさんに試みて欲しいことがあります。先ほど「身体を伴う感情表現の場所はどンドン上昇しています」と記しました。逆にこれを下降させていくとどうなるでしょう。想像してみてください。クラウド化された空間上の怒りから頭、胸、腹へと感覚を徐々に降ろしていったとします。どこまで実感が持てるでしょうか。先人と現代人では腹が感覚的に同じ場所かわからないと言いましたが、⑥「腹に落ちる」「腹を割る」「腹が据わる」といった慣用句から連想されるのは、腹による体感意識が介入し、コントロールしてはあれこれと迷うといった

Bヨチが生じにくいらしいということです。

そうなると「腹が立つ」には「なんだかモヤモヤする」といった不透明さはなく、明確に「立つ」感覚が伴うということがわかります。立っているのだからどうしようもない。意識的に「冷静になれ」などと言ったところで紛らわしうがない。だから腹いせに何をするかといったら暴飲暴食とか路傍の石を蹴り上げるとかの八つ当たりです。言葉による沈静ではなく、必ず行為が生じること腹立ちも紛れるわけです。

何かものごとが起きたことを受けて感情が生じます。そういう意味では受け身かもしれませんが、確固とした身体から発した感情には能動性があります。だから、「自分が怒ると周りの迷惑になるだろうか」といった社会性が登場するヨチはあまりありません。なぜなら立腹は至って個人的な出来事であり、だからこそ本人にとって大事な感情だからです。

いつでも感情の抑制を利かすことができるとしたら、それは他人に受け入れられる「あるべき姿」として仕付けられ、選ばれた「意識的感情」とでもいうべきものです。発火するような、ものごとくに直接応じるような感情表現ではありません。想定された感情なので拠点となる主体がなく、つまりは身体がない。「腹が立つ」といった怒りの表明は「いま・ここ」にいる私の身体に根ざしています。しかし、身体のないイメージの感情なら私の怒りは表していいかもわからない、常に曖昧なものにならざるをえないでしょう。

他人からの理不尽な攻撃や不快な言動を受けてすら、怒っていいかどうかわからなくなるのは「怒ると相手に嫌われる」とか「場所をわきまえないといけないのではないか」といった社会性を優位に置こうとする意識が瞬時に介入するからでしょう。私だけの怒りを味わいもせず、体験もしない。それは冷静さとは呼べず、ネグレクトに近いかもしれません。

私の基盤が身体になく、怒りの輪郭が明らかでないのであれば、何が自身の行動のCシシになるかと言えは空気との同調でしょう。そのとき「どういう空気であるか」を問わなくていいのは、何より空気であることだけが大事だからです。

「本当は嫌だけど周囲に合わせた」といったことで自分の行動を説明することがあるかと思えます。この言い分が示すのは、鬱悶気が息苦しくても本質的には構わないということです。「居心地が良い」とはそこに馴染めるかどうかの⑦慣れの問題であって、体感として心地良いとは限らないかもしれません。それでもなければ嫌なことをし続けられないはずだからです。

ここまで話を進めると次第に明らかになってくることがあります。パワハラに見られるような、些細なミスであつても暴言を吐く機会と捉えるような執拗さで怒りが表明されるとしたら、これは本当に身体に根を持った怒りなのか？ ということです。衝き動かされるとは、そのときその場でしか起こらない一回性の出来事のはずです。だから「抑制できず、つい衝動で言ってしまう」が執拗に繰り返されるとしたら、それは慣習化された反応にほかなりません。いわば「レモンを思い浮かべたら唾が出る」といった条件反射であつて、怒りとは別の企てがあります。そのことに気づかないからこそ、私たちは無闇に怒りを避けたがるのかもしれませんが。

〔注〕

（『モヤモヤの正体——迷惑とワガママの呪いを解く』 尹雄大）

- \* 1 炎上騒ぎえんじょうさわぎ がある出来事や、それにかかわった人物・団体などに対して、主にインターネット上で、激しい批判や中傷が広がり収拾がつかなくなってしまう状態のこと。
- \* 2 サーバー ここでは、主に、インターネット上で情報を集積する倉庫のような役割を果たすところ。
- \* 3 ダウンロード サーバーから個々の情報を受け取ること。
- \* 4 逸脱 本来の意味や目的からはずれること。決められた範囲からはみ出すこと。
- \* 5 不文律 互いが、暗黙のうちに了解し合っているきまり。
- \* 6 激昂 是げしく怒ること。
- \* 7 悲憤慷慨 世の有様や、自己の運命などについていきどおり、嘆き悲しむこと。
- \* 8 ネグレクト 無視すること。
- \* 9 パワハラ 組織において、地位や職権を利用して部下に嫌がらせを行い、心身に苦痛を与える「パワーハラメント」の略語。
- \* 10 執拗 是しつこいこと。

問一 ―線①「古人の感じていた腹」とありますが、これを筆者はどのようにとらえていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ときに激しく発露はつろされる感情が根ざしているところ。

イ 自らの思考の支えとなり、怒りいかをこらえるためのところ。

ウ 東洋の古い医学で説明される生命全体の重要なところ。

エ 感情を他人に見せないように隠かくしておくためのところ。

オ 心理的な負担が痛みなどの身体的な症状しょうじょうとして現れるところ。

問二 ―線②「クラウド化している傾向」とありますが、「クラウド化」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来自分の意思で制御せいぎよできるはずの感情が、他人の感情によって支配されてしまうようになるということ。

イ 感情が自己の身体から離れ他者と共有されることで、自分の感情の実感が弱まってしまうようになるということ。

ウ 個人の経験した感情が社会で共有され、他者の感情も自分の感情として実感が得られるようになるということ。

エ 自分だけのものであるはずの実感が全て他者に共有されてしまうので、個人的な秘密だれを誰も持てなくなるということ。

オ 抑えおさきれない激しい感情でも、自身と距離きょりを置くことで、客観的な視点で自己分析ぶんせきができるようになるということ。

問三 ―線③「他者の経験を社会的に価値付けられるようにしている」とありますが、「社会的に価値付ける」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一部の人のしか評価されていない個人の感情を、多くの人と共有して社会の中から価値がわかる人を探し出すこと。

イ 誰だれにも分かるはずのない主観的な感情を、共通の言語を通して伝えることで客観的な理解を得ようとする事。

ウ ある個人の感情を、受け手がそれぞれの価値基準に照らして判断することによって感覚的に受け入れていくこと。

エ 輪郭の曖昧な個人の感情を、周囲の人々が明確な言葉にして共有可能とすることで、社会的意義が与えられること。  
オ 個人的な感情を否定するのではなく、言語化することによって他者からの客観的な肯定を得ようとする事。

問四 空らん「④」に当てはまる語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そして    イ なぜなら    ウ しかし    エ だから    オ つまり

問五 —線⑤「いま私たちがくなっています」とありますが、「装置めいたもの」という表現を使うことで筆者はどのようなことを言いたいのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつて感情は制御できなかったが、現代社会の発展に伴って理性や言葉によって自由に表現できるようになった。

イ 現代人は、情報化社会において必要がなくなった感情を刺激することのないように、自ら身体感覚を手放した。

ウ 衝動的で単純な感情の爆発が、理性的な思考を働かせることによってその場に応じた振る舞いと改善された。

エ 理性的言動が求められる現代人は、本来制御不可能であるはずの感情を、制御することが正しいと思込んでいる。

オ 感情は、本来どうにも表せない根が深いものだったのに、言葉で説明できるような手軽なものに成り下がっている。

問六 ―線⑥『腹に落ちる』『腹を割る』『腹が据わる』といった慣用句」とありますが、この三つの慣用句それぞれの意味の組み合わせとして最も適当なものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

「腹に落ちる」 「腹を割る」 「腹が据わる」

ア 同意する 打ち明ける 落ち着く

イ 同意する 信頼する 激怒する

ウ 同意する 信頼する 落ち着く

エ 納得する 打ち明ける 激怒する

オ 納得する 打ち明ける 落ち着く

カ 納得する 信頼する 激怒する

問七 ―線⑦「慣れの問題」とありますが、なぜ「慣れの問題」となってしまっているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の感情の正体がかめないので、自身の行動の基準が定められず、周りに合わせるしかできなくなるから。

イ 辛く苦しい環境かんきょうに置かれた場合は、自分が変わるだけでは意味がなく、周りが変わるのを待つことも必要だから。

ウ 現代人として社会全体の生産性を向上するためには、感情を抑えるべきだという合理的な体感が求められるから。

エ 息苦しく感じる集団の中で、感情は自然と湧き上がるものであり、周囲の状況によって左右されるものではないから。

オ 周りの空気がどれほど重苦しいとしても、自分の感覚は他人の感覚と共有されず、個人的なものでしかないから。

問八 筆者は怒りの感情を説明するにあたり、「腹が立つ」という表現を使っていますが、「腹が立つ」という言葉によって「怒り」がどのようなものであると言っているのですか。本文全体の内容をふまえて六十字以内で答えなさい。

問九 ―線A「キョクメン」・B「ヨチ」・C「シンシ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画ていねいにはつきりと書くこと。)

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

我が家の近所には、不思議な店がある。

その店は、今ではあまり見る事のできなくなった昔ながらの駄菓子屋<sup>だがしや</sup>のだが、店の入り口にでかかと、

『大人入店禁止』

と書かれた貼り紙<sup>は</sup>がしてある。普通の駄菓子屋<sup>だがしや</sup>にこんなものはないだろう。

そしてもう一つのおかしな点。それは、店を出る時の子供たちの表情だ。

店を出る子供は皆<sup>みな</sup>、なんとも晴れやかな顔をしている。最初は「駄菓子を買ったのだから当たり前か」と思っていたのだが、店

に入る前、この世の終わりかという風に落ち込んで見えるように見えた子供さえも、店から出てくる時には不自然なくらい晴れ晴れとした表情をしているのだ。

一体、店の中はどうなっていて、どんなものが売られているのだろう。

ついに我慢<sup>がまん</sup>ができなくなった私は、店を出てきた子供たちに声をかける事にした。

「ねえ、君たち」

晴れやかだった子供たちの顔が、①一瞬<sup>いっしゆん</sup>にして不安げな表情に変わる。

「ここのお店、何屋さんなの？」

私がそう聞くと、一番背の高いガキ大将風の少年が、

「駄菓子屋<sup>だがしや</sup>」

と答えた。彼の手には、昔私も好んでよく食べていたチョコ菓子が握<sup>にぎ</sup>られている。私がそれを指さして、

「それ、おいしそうだね」

と言うと、少年はチョコ菓子がしを背中の方へと隠かくしてしまった。

「一つ食べてみたいな」

できるだけ怖こわがらせないように、笑顔を作りながらお願いしてみたが、少年は、

「これ、大人は食べちゃだめだから」

と言って走り去ってしまった。他の子供たちがばたばたと彼かれに続く。

すると、一番背の低い女の子のポケットからあめ玉が一つ、コロリと落ちた。女の子は気づかずに行ってしまう。拾い上げてみると、これも昔ながらのあめ玉だった。パッケージに懐なつかしいキャラクターが印刷されている。包み紙を開けると、琥珀色こはくいろのおいしそうなあめ玉が出てきた。やはり、普通のあめ玉だ。

私は店の方を窺うかがい、誰だれも見していない事を確認するとあめ玉を口に入れた。

すると、頭の中に、

「たまには、よふかしもたのしいよ！」

という声が響ひびいた。驚おどろいて辺りを確認したが、周りには誰だれもいない。

しばらくすると、今度は、

「まんがだって、たいせつなぶんきょう！」

と、甲高い声かんだかが頭の中に響ひびいた。昔なにかのテレビ番組で聞いたことのあるような声だ。

一体これはどうなっているのだ。その後も、

「おとうさんもおかあさんも、じつはなきむし！」

「あそびはだいいち！ ぶんきょうはそのつぎ！」

等なぞといった、「②」が頭に鳴り響なびいた。

あめ玉が小さくなるにつれて、頭の中に響く声も小さくなっていき、最後には完全に消えた。なんだったのだ、今のは……。

私はこのあめ玉の正体がどうしても気になり、『大人入店禁止』の貼り紙がみを横目に店の中に足を踏み入れた。

そこには、昔懐かしい光景が広がっていた。

あめ玉、ガム、チョコ菓子、子供が喜びそうな駄菓子だかしが所せましと並んでいる。どの菓子も私が子供の頃見た事のあるような、懐かしいものだった。

ガムを手にとってみると、おかしな点が一つあった。各種成分表や賞味期限の下に「対象年齢」の表記がある。駄菓子の対象年齢……？

「いらっしやい」

唐突とうとつに声をかけられ、私は手に持っていたガムを取り落とした。

慌あわてて拾いながら声のした方を見ると、店の奥、恐らく店の主が生活をしているのであろうスペースから、老婆ろうばが顔を出していた。

「表の貼り紙は見えなかったかね」

『大人入店禁止』という貼り紙の事を言っているのだろう。

私はガムを棚たなに戻しながら答えた。

「すみません、どうしても気になったもので」

「まあ、いいけどね」

(中略)

老婆は店の奥に引つ込み、籠いっぱい菓子を持って戻って来た。そして、「選びな」

と言つてこちらに籠を差し出して来る。

「結構です」

「いいから、選びな。ただし一つだけ。これは大人用の駄菓子だよ」

駄菓子に大人用と子供用があるなんて聞いた事もない。しかし確かに、籠いっぱいの駄菓子は店に並んでいるものと少しパッケージが違っているようだ。

老婆が一向に籠を引つ込める様子がないので仕方なく飴を一つ取った。パッケージには③「想い玉」と書いてある。④対象年齢は十五歳以上。

包み紙を開けると透明で水晶のようなあめ玉が出てきた。もしおかしな味がしたら吐き出してやろうと思いつつ口にくくと、ほんのりとした甘さが口いっぱい広がった。そしてそれと共に、頭の中に、あるイメージがゆっくりと浮かび上がってきた。

私は布団に横たわっているようで、目の前には天井がある。この見覚えのある天井は、実家のものだ。布団の脇には水の張つてある洗面器と子供の頃何度も読み返した漫画本が数冊置いてある。

母親が布団の側に腰をおろし、テレビを観ながら私の頭をなでていた。

昔、私が熱を出すとよく母親がこうして看病してくれた。

じつと見つめられながらだと迷惑をかけている気がして落ち着かなかったが、こうして何かをしている最中の母親に頭をなでられるのが、私は好きだった。

母の手の温もりを感じていると、段々とそのイメージは薄れていき、今度はいつのまにかファミリレストランのレジに立っていた。

目の前で父親が会計を済ませている。父は今よりも随分と若い。

店員の差し出すレシートを手振りです断った父親は、私に声をかけた。

「行くぞ。自転車であっているんだろう。後ろから車でついて行ってやる」

父の言葉を聞いて、ようやくここがどこなのか思いだした。

ここは、家から自転車で二十分程の距離にあるファミリレストランで、当時中学生だった私はこの隅の席で勉強をしていた。すると、高校生らしき男数人が私のテーブルに腰掛け、

「何してんの？ 勉強？ えらいねー」

等と言いながら金を要求したのだった。

なんとか逃げ込んだトイレで、扉の前に男たちの気配を感じながら私は携帯電話で父に助けを求めた。

間もなく、店にやって来た父は普段の温厚な性格からは想像もできないような大声をあげて不良たちを一喝し、会計を済ませて私の前を歩いた。父の背中を見つめ、私はいまだ大きなものに守られている存在なのだと思いついて、⑤情けない気持ちと安心感がないまぜになったのをよく覚えている。

父の背中が段々と薄れていくと、今度は目の前に大量のレポート用紙とコンビニのおにぎりが現れた。ああ、このおにぎりは……。

当時大学生だった私は、勉強以外の遊びに夢中になりすぎて進級の危機に立たされていた。「今日中にレポートを出せなければ留年とする」そう担当教授から言い渡された私は目の前が真っ暗になった。とてもその日中に仕上げられる量のレポートではなかった。

私が構内にある休憩スペースで頭を抱えていると、話を聞きつけた友人たちが次々に集まって来た。

「間に合うだろ。やるぞ」

そう言って友人たちは「汚ねえ字だなあ」等と文句を言いながら私の字を真似てレポートを書き始めた。パソコンが得意な奴はデータをまとめ、資料をプリントアウトした。

日が暮れて、次々と他の学生が帰っていく中、私たちはコンビニで買って来たおにぎりやスナック菓子をかじりながらレポートを作った。

そしてようやくできあがったレポートを提出し私は留年をまぬがれたのだった。

手伝ってくれた友人たちになんと言ったらいいか分からない私に、彼らは「ボーリング行くぞー」と言って肩を組み、尻を蹴った。

大学入学と共に親元を離れ、新しい土地でできたこの友人たちに私は、それまでの地元の友人たちと比べてある種のよそよそしさのようなものを感じていた。

しかしそんな私に彼らは手を差し伸べてくれた。

⑥私はボーリング場のトイレで一人、声を殺して泣いたのだ。

はっと気がつくのと、今の私も涙を流していた。目の前にいる老婆の姿がぼやけている。

「気にせず泣くといい。それを舐めると、どうせみんな泣くからね」

老婆はティッシュ箱を差し出しながら言った。

「あたしは不思議だよ。あんたたち大人はそういう想い出をなぜか忘れようとする。親の愛を疎ましく思ったり、友情をないがしろにしたりね。そういうものに頼るのは、甘ったれていると決めつけるのさ。昔は好きだったくせにね。子供の頃より、今の方

がずっと大変なんだろう？ だったら、たまには甘い思いもしなさい。周りに頼って、自分を甘やかしたってあたしはいいと思うがね」

ティッシュを一枚引き出し、涙と鼻水をふく。一枚では足りず二枚、三枚とティッシュを引き抜くと老婆がティッシュ箱ごと渡して寄越した。

私はいつから他人に頼る甘さが悪だと決めつけたのか。苦しい事も黙って、一人で耐えなければならぬと自分に強いたのだろうか。

苦しい事や辛い事は、放っておいてもやってくる。しかし、世の中には自分を救ってくれる甘さもあるという事は、誰かに教わるものだ。

この駄菓子屋は、甘さに餓えた子供たちの拠り所なのかもしれない。魅力的な駄菓子と、優しいお婆ちゃん。こんな場所が、あつてもいいのかもしれない……。

「また来てもいいですか」

私が尋ねると老婆は、

「店を閉めた後ならね。話を聞くぐらいならしてやるさ。ただし、菓子はやらないよ。やたらと食べるもんじゃないからね」と言つて背を向けて店の奥へと引つ込んだ。

誰かが話を聞いてくれる。それだけで、十分だ。

礼を言つてから、店を出る事にしてドアへ向かう。そんな私を老婆が「ちよつと待ちな」と呼び止めた。

⑦「あめ玉ひとつで三十円。ただでやると思つたかい。世の中、そんなに甘くないよ」  
いたずらっぽく笑いながら、老婆が手の平をこちらに差し出していた。

( 『ふしぎな駄菓子屋』

小狐 裕介 )

問一 ー線①「一瞬いつしゆんにして不安げな表情に変わる」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子供だけの秘密の店に入店しようとしている大人に対して敵対心を持ったから。

イ 駄菓子屋だかしやの秘密が大人にばれたらもう来店できなくなるのではないかと心配になったから。

ウ 晴れ晴れとした気分になっていたのに知らない大人に台無しにされて不満に感じたから。

エ 知り合いでもない大人が自分たちに何の用があるのかわからず不思議に思ったから。

オ 子供達のための駄菓子屋だかしやの前で声をかけてくる見知らぬ大人を警戒けいかいしているから。

問二 空らん「②」に入れるのに最も適当な表現を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子供が聞きたくない言葉

イ 子供がおもしろがる言葉

ウ 子供が思いもしない言葉

エ 子供に都合の良い言葉

オ 子供には不相応な言葉

問三 ―線③『「想い玉」』とありますが、この商品名である理由として最も適当だと考えられるものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 口にすると、いつの間にか忘れつつあった大切な「想い出」を思い出させる「あめ玉」だから。

イ 口にすると、それまで知らずにいた身近な人たちの「想い」に気づかされる「あめ玉」だから。

ウ 口にすると、周囲の人々に対して自分が抱いていた本当の「想い」に気づく「あめ玉」だから。

エ 口にすると、強い「想い」を残している相手との「想い出」を追体験できる「あめ玉」だから。

オ 口にすると、苦しいものだった「想い出」を温かいものに塗り替えてくれる「あめ玉」だから。

問四 ―線④「対象年齢は十五歳以上」とありますが、これは「十五歳」という年齢がどのような年齢だと考えられるからですか。「くするようになる年齢。」につながる形で二十五字で探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出しなさい。

問五 ―線⑤「情けない気持ちと安心感がないまぜになった」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ほとんどのことは自分一人でできるつもりになっていたが、実際には父に助けてもらわないと何もできないことを悔しく思い、同時に、複数人相手にひるまず戦える父親の強さにあこがれた。

イ 父親のことは誰よりもよく知っているつもりでいたが、温和で優しいが頼りない人だと誤解していた自分を恥ずかしく思い、同時に、自分も父のように頼もしい人間になれるかもしれないと希望を持った。

ウ 大人の助けがなくても一人で何でもできると思っていたが、本当に困ったときには大人の力を借りないといけない現実にながっかりし、同時に、困っている子どもにすぐに助けを出せる父親を心強く感じた。

エ 自分は誰から見ても一人前だと思っていたが、不良たちからはおとなしく言うことを聞きそうな子どもだと思われてしまったことに傷つき、同時に、不良が逃げるほど父親は強いのだとわかって嬉しかった。

オ 自分では、もう大人なので親に守られる必要はないと思っていたが、父に危機を救われたことで、自分が未だに無力な子どもであることを痛感し、同時に、自分を守ってくれる父親に対する頼もしさを感じた。

問六 ―線⑥「私はボーリング場のトイレで一人、声を殺して泣いたのだ」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遊びに夢中になりすぎて単位を取れなくなりそうだったことが恥ずかしく、またその危機を友人の助けなしには乗り越えられなかった自分がふがいなく、悔しさを抑えきれなかったから。

イ 大学の友人たちは、頼まれなくても「私」の危機を救いに来てくれる優しい人たちなのに、「私」からはどうしても心を開けずにいることが申し訳なく、どうしようもなく辛い気持ちになったから。

ウ 「私」は大学の友人たちに対して心を許しきれていなかったにもかかわらず、彼らが「私」の危機に自ら駆けつけ救ってくれたことで、真の友情があったことに気が付き、嬉しく思うとともに深く感謝したから。

エ 大学の友人たちも自分と同じように遊んでいたのに、自分だけが単位を取れなくなりそうだったことに傷つき、課題の提出後すぐにボーリングに連れ出されてしまったため次の課題のことが不安で仕方なかったから。

オ 教授から課題を出されたときは留年を覚悟したが友人たちの助けを得てどうにか期限内に課題を提出し、ボーリング場のトイレで一人になったとたんに緊張が解け、これで友人たちと一緒に卒業できると急に安心したから。

問七 一線⑦『「あめ玉ひとつで〜甘くないよ』とありますが、老婆のこの言動を最後に書くことで、作品にはどのような変化が生じますか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 老婆の誘いに乗って店の菓子を口にした客に、後になって金銭を要求する老婆の欲深さを描くことで、作品全体に緊張感が生まれる。

イ 飴を味わった私に、甘い思いも必要だと言いながら「世の中甘くないよ」と金銭を要求する老婆の言葉遊びが、軽やかさとおかしみを加える。

ウ それまで不愛想だった老婆が金銭を要求するときだけ笑顔を見せることで、すべて商売のための作り話だったという意外な結末を導く。

エ 最後にからかわれることで、「私」は大人になっていても老婆から見たら未熟だということが描かれ、今後の「私」の成熟を期待させる。

オ 深刻に悩んでいても、たった三十円で気持ちが晴れるという事実を示すことで、人生において悩むことは実は価値のないことだと気付かせる。

問八 本文中における、現在の「私」の人物像の説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辛い目にあっても文句ひとつ言わずに、思い出を支えに乗り越えている人物。

イ 現実の問題を直視できず、子供のころの体験にとらわれている人物。

ウ 苦しい時でも人に頼ろうとせず、一人で孤独に頑張っている人物。

エ 孤独でいることに耐えられず、人とのつながりを自ら求めている人物。

オ 周囲に頼れない環境に疲れ、甘い菓子を食べて現実逃避ばかりしている人物。

問九 一線「店を出る子供は皆、なんとも晴れやかな顔をしている」とありますが、最終的に「私」はその理由をどのようなも

のだと考えましたか。本文全体をふまえて六十字以内で説明しなさい。

